式辞

佐賀県立唐津西高等学校
校長　下村　昌弘

今年の冬は、十年に一度と言われる大寒波が到来し、少なからずこの唐津の地にもライフラインに被害をもたらしました。そして今、３月。登校坂の桜並木のつぼみも少しずつ膨らみ、春の訪れを教えてくれています。

「冬」という言葉は、「増える」が語源であるという説があります。一方「春」という言葉は「膨張する」の「張」、「張る」からきているという説があります。植物の芽は、「冬」の間に、花を咲かせようとするエネルギーを一日一日「増やし」ながら、はちきれんばかりに「膨張」させ、「春」の訪れとともに一気に芽吹き、花を咲かせます。

寒く、厳しい冬が終わり、希望に胸膨らむ春の季節がやってきました。玄海灘から吹きわたる松浦の風にも柔らかみを感じられるようになりました。

コロナ禍の終息を意識の片隅に感じながら、この三年間で得た、オンライン等、新たな方法を活かし、参列者の人数を幾分増やし、また、在校生のアイデアを取り入れながら、新しい卒業式を作り上げることにしました。

こうした中、まつら同窓会長中島幸利様、振興会長濱道正和様をはじめ、コミュニティスクールとしての新たな歩みを推進していただいた学校運営協議会委員長川島雄輔様、他、多くの来賓の方のご列席を賜るとともに、たくさんの三年生の保護者の皆様のご参列を得て、本日ここに令和四年度佐賀県立唐津西高等学校卒業証書授与式を挙行できますことを心より感謝申し上げます。

一五〇名の三年生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは高等学校三年間の教育課程を修了し、本日をもって唐津西高等学校での学びに終止符を打つことになります。三年前、マスク不足の中、マスク推奨に始まった高校生活も、マスク着用はそれぞれの判断に任せるという状況にようやく変化しました。いわば、コロナに縁どられた三年間を振り返る時、皆さんの脳裏には何が思い浮かびあがるのでしょうか。

昨年夏の高校野球で優勝したのは宮城県の仙台育英高校でした。その監督である須江航さんのインタビューが多くの人の共感を呼びました。
「僕たち大人が過ごした高校生活とは全く違う。青春ってすごく密なので。そういうことは全部だめだと言われて」

思えば、皆さんの高校生活の全ては「密が禁じられた」青春でした。
体育祭や文化祭の縮減、修学旅行の変更、高校総体実施方法の変更、対面行事の中止・簡素化などなど、全ては「コロナ禍だから仕方がない」という言葉で切り捨てられ、半ば思考停止の状況に追い込まれてきたのも事実です。

皆さんはこうした状況に不満とともに絶望、無力感すら感じていたのではないでしょうか。

だからこそ今、皆さんに伝えたいことがあります。それは絶望しても不満を募らせても何も変わらないということです。この逆境の経験は自分を強くしてくれた。ふがいない大人に成り替わって、いよいよ自分たちの出番なのだと考えてほしいのです。

昨年四月、民法が改正され、青年年齢が十八歳に引き下げられました。これは十八歳、十九歳の若者も国政上の重要な事項の判断に主体的に参加せよというメッセージです。今こそ若者の出番なのです。

皆さんは、遠い将来から今を振り返った時に、逆境に青春時代をさらされ

た稀有な世代として位置付けられることでしょう。裏を返せば逆境が自分を強くしてくれた逞しい世代であると私は思っています。きっと皆さんにとって、青春という多感な時代にこの経験をしたことが、この後の人生で大きな糧となることでしょう。つまり、皆さんは幸運にも、逆境を言い訳にしない、ピンチをチャンスと考える思考法を学んだということです。今なお逆境にいるかもしれない皆さん、自分の周りのこと以外、どうでもいいと思っている皆さん、チャンスはピンチの顔をしてやってくるのです。

差別的な発言で更迭された大臣秘書官、ルフィなどと名乗り、外国から連続広域強盗殺人事件への指示を出していた容疑者たち、ネットやニュースで毎日のように現れる、せこくてカッコ悪い大人たち、こうした大人が出てきたら、それこそチャンス、皆さんの出番だという合図なのです。

「なにかおかしくないか？」と違和感を覚えたら、きっと皆さんの方が正しいはずです。いつの時代もその雰囲気を一番敏感に感じ取れるのは若い世代であり、若者である皆さんの姿にこそ時代は投影されているのです。ですからどうか今のその感覚を大事にしてください。

こうした時代状況の中、本校は各教科の学習のみならず、部活動や生徒会活動、ボランティア活動や総合的な探究の時間、加えて、校外でのイベントや講座への自主的な参加をとおして、体験を学びに変える教育活動を推進してきました。その中で特に大事にしてきたのは、自ら問いを立て、それを深掘りする、考え続けるということでした。その時その時の考えは、決していい答えではなかったかもしれないけれども、考え続けてたどり着いた「内容」と同時に、考え続ける「姿勢」こそがこれからを生きる自分の核になっていくはずです。

さて皆さん、これから十年間が新たな勝負の時です。皆さんは北方謙三という小説家を知っていますか。幼少期をこの唐津で過ごしたハードボイルド、歴史小説の大家です。その北方謙三氏は「体験というのは小説を書くときの

十パーセントくらいの核になっている。あとはその体験にいろんな願望や想像力が加わって小説になっていくんだろうと思う」と語っています。

体験は体験としてとても貴重なものですが、楽しかった、きつかったと一次的な感覚に終わるのではなく、それを核に深掘りする、二次的に深め広げることが大切だということを教えてくれています。

また、北方謙三氏の二十代の十年間は肉体労働をしながらひたすら小説を書き続け、ボツになった原稿用紙は積み上げると背丈を越えるほどだったそうです。作家という職業に当初否定的な発言をしていた父親も「十年間同じ場所でじっと我慢していられたら、何かが出てくる」と励ましたと言います。

青春とは意味のあることを成し遂げることではありません。どれだけそれに没頭できたか、どれだけ純粋で一途になれたか、その姿が尊いのです。青春時代にすべてを完成させようと思っていると、ちまちま小さくまとまった生き方になりがちです。

そういう意味でこれからの十年は、これまで触れてこなかった様々な人々との交流、様々な体験を通して、自分の価値観を揺さぶり、今までの価値観を壊し、新たな「自分づくり」の日々、自分という存在を自分の力で生み出していく毎日であることを祈っています。

経験すること、それを学びに変えることをとおして初めて徐々に自分が何者であるか、姿を現してくるのです。何を経験したか、そこから何を学んだかによって自分が何者であるかが決まっていくと言ってもいいでしょう。

「解体と創造をとおして自立への道を歩め」。この言葉を旅立つ皆さんへのはなむけの言葉としたいと思います。「自分崩し」と「自分づくり」。それが「解体」と「創造」です。それが「人間的自立」です。「解体と創造をとおして自立への道を歩め」。

さて、いよいよ別れの時が近づいてきました。旅立つ皆さんの姿は、唐津の海を見下ろしながら、遠く天空に舞い上がっていこうとする「龍」のように思えて、私の胸は高鳴ります。四月からはそれぞれの場所でそれぞれの新しい挑戦が始まります。この三年間で十分なお土産を持たせられたか、いささか不安ではありますが、ここで過ごした日々を胸に、新たな志をもって自分の足で前に進んでください。

最後になりましたが、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。在校生及び三年担当者をはじめ職員一同、心からお祝いを申し上げます。保護者の皆様にはこれまで物心両面にわたり、本校教育活動への御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございました。コロナ禍の中、皆様の御支援なくしては本校の教育活動をこれほど円滑に進めることはできませんでした。高いところから恐縮ではございますが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。今後、お子様のますますのご活躍を心から応援し、祈念しております。

卒業生の皆さん、今日帰ったら、お家の方に一言御礼を言ってください。「これまでありがとう」と。できれば手を握って。皆さんが生まれたときは柔らかだったその手も、きっと今はガサガサごつごつです。その手が十八年間皆さんを育ててきた手です。皆さんを高校に通わせるために大変な苦労をなさった手です。どうか手を握って差し上げてください。

では、卒業生の皆さん、お別れです。また会える日を楽しみにしています。それまで元気で自分づくりに励んでください。「解体と創造をとおして自立への道を歩め」。卒業おめでとう。

令和五年三月一日

佐賀県立唐津西高等学校　校長　下村昌弘